

総括報告
視察の総括と上海空調人脈、国際会議の経緯など
団長：中原信生

開催趣旨

人口増加と高度成長を続ける中国では、環境を保全し、かつ持続可能な発展を目指した国家戦略を推進している。このたびの海外研修では、北京で開催される「北京B S 2 0 0 7」、「清華大学シンポジウム」二つの国際会議に参加し、参加者によるプレゼンテーションを行った。また、上海の同済大学では学生や上海市関係者を交えての技術交流会を実施し、日中の環境分野における活発な技術交流を深め、今後の公共建築分野の施策の展開に資することを目的とした。(以上、募集パンフレットを過去形に変更して引用)

このたび、公共建築協会の時田常務より一昨年に引き続いて団長の任を務めるべく依頼を賜り、お引き受けさせて頂いた。一昨年の調査団報告書にも紹介したとおり、筆者の初めての訪中が1983年の北京(建築科学院空調研究所・清華大学)、西安(西安冶金建築学院)、上海(同済大学)での学術交流・講演であり、いまは経済発展・高層ビル街で極めてポピュラーになった上海近辺の、歴史ある文化の香りの満ちた江南地方にいつか機会があれば同氏を上海にお連れしたいとの思いを実現できるという期待を持っていた。

まして国際会議は、仲間内の会話以外はすべて英語である。それが原則であるとして参加者を募ったとしても、実際に英語を聞き取れる人がどれほどいるか、自分のことから類推しても心細いということのほか、折角始めて中国に来られる方にとって国際会議に缶詰では体験としては十分ではなく勿体無いとの気持ちを強く持ったので、北京以外で、となると先ず上海をおいて無い、と依頼された当初からの思いに従ってこのことを時田さんに

お話し了解を得てその実現に向けて準備をした次第である。

以下、旅程中の行事についてはそれぞれ記録担当の方々が書かれるので、先ずざっと総括をさせて頂いた後、背景描写的に今回のイベントに関連する人のつながりを中心に話を進めていきたい。ただし、北京と清華大学については一昨年の報告書に詳しく述べたので今回は上海に重点を置く。なお上海は昨年度の尾島先生の調査団の、上海万博を含め都市計画的側面に重点を置いて充実した調査・討論をなされた訪問地と重複するが、重点対象の相違から内容的な重複性は少なく、両報告書を併せお読みいただくとより広く上海をご理解頂けると思う。

総括

今回は、北京の国際会議の日程、ならびに主催者及び団員各位の予定などを勘案した結果、先ずは上海の地に降り立つことになった。経済的にも政治的にも、中国の大きな核であり牽引車でもある上海の、エネルギー・環境・建築技術の各面から最も気になる点について検討し討論しておきたいと、上海市政協の環境・エネルギー担当の幹部の方々との懇談を



メインに、そして上海市の古い町並みと最先端の町並みを対比的に参観することによって、対象を歴史的に考察することができるようスケジュールを組んだ。

筆者の下に留学されて今上海で活躍する人達に最大限に協力してもらい、そして相手方、即ち上海市政協や同濟大学の教授方、そして森ビルの現地事業所のご好意により、短い日数の中で所期の目的を十分に達せられたと思う。上海在住の関連各位、なかんずくこれらの段取りに応えてくれた李克欣、李小平の両氏の努力、そして団員各位の統一ある行動に対し感謝申し上げたい。

上海を終えて北京に飛び、いよいよ本題である BS 07 と ISHVAC 07 の二つの国際会議の英語にどっぷりと漬かることとなった。発表者と、予め打ち合わせたとおりの記録担当者は義務的に、それ以外は自らの興味の在りかたに従って適宜部屋を分かれて出席し、各セッションに分散して会議の雰囲気に溶け込むようにした。会議には本団とは無関係に訪中されて発表される日本の研究者たち、また北京から本団に参加する人たちを含めて、外国人としては 30 人を超える最大多数の日本人が出席することになり、清華大学の主催者の方々から大いに感謝された。団員の発表者或いは司会の方々の任務も無事終え、そして担当に従った記録も無事?まとめられて本報告書に掲載されることになった。聞き取りにくかったところは入手した CDROM に頼って後学の結果であるところが多いと思われるが、団員各位の努力、協力に心から感謝したい。それぞれの国際会議にまつわる情報などは後に述べたい。

北京ならびに清華大学は一昨年の視察の主対象であったことと、清華大学との再たる討論の場を別に設けることは、二つの国際会議の遂行を見事やり遂げた清華大学の面々の疲労振りを眼にするにつけ申し入れることは無理であったが、ISVAC 07 の最終日に江教授

のコーディネートする地域冷暖房に関するフォーラムでは、これに匹敵する情報交換と討論ができたと思われるので、以て瞑すべきであろう。最終行程は頗和園の見学で強行の旅の疲れを癒し、別れの晚餐会白酒で祝って全行程を終え、翌日、東京・関西・中部の各空港へと帰国の旅に発ったのであった。

先憂後楽

今回の北京行きも一昨年度に引き続いて清華大学を訪問することになる。実は昨年度も、公共建築協会及び日建設計と私どもとの共同調査作業にて清華大学を行き来しており、その際、学術面に加えて、省エネルギー事業に対する日中の行政省庁のメンバーも加わった政策的討論も活発に行ったところであった。そこで、行政機関でも民間団体でもない中間的性格の公共建築協会という団体は、そのような討論をコーディネートするのに格好な役割を受け持つことができるということを身に沁みて感じていたところであり、今回も団員の方々に、上海でただ街を見学だけではなく、中国政府の経済発展と環境・エネルギー対策に対する意気込みに直かに触れさせてあげたいと考えた。



「天下の憂いに先んじて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ」(岳陽楼の記、范仲淹)は後楽園の名から、また高校時代の漢文などで学習するところの、上に立つ者の持つべき心構

えを諭す名句として知られるが、同濟大学の范存養教授はこの范仲淹の子孫でいらっしゃるとのこと。筆者と同じ年 1933 年の生まれ、1983 年に始めて筆者が上海にて講演したときにお会いしそれ以降、親交を保ってきた方である。教授の最近の著書として「大空間建築 空調設計及び工程実録(中国建築工業出版社、2001)」があり、また早稲田大学井上宇市先生の研究室にも滞在され、先生の「空気調和ハンドブック(同出版社)」の中国語版翻訳者のお一人でもある。日本語も達者で、建築設備の教授としては、北京の吳元煒教授と共に日本との交流の最も深いお一人であり、日本人の知人も多く、昨年度、空気調和・衛生工学会の国際名誉員に推挙されている。先生に案内して頂く蘇州観光は絶品であり、今回もこちらからお願ひするまでもなく私達の自由行動時には全面的に同行してくださり、上海に最も近い水郷として有名な朱家角にも同行してくださり、まさに人と風景と、中国江南の歴史の接点を体験することになった。



上海には私の教え子が数名居る。その中の一人、李克欣君は数年前にも時田さんにも北京でご紹介した人で、上海市政協常議員をしており、彼を幹事とすれば省エネルギーに関する政策的論議も可能になるとの強い思いがあった。彼は 1996 年に私が名大を退官するまさにそのときに博士号を取得してくれて博士課程を終了し、以降、日中の仲立ちをしたい

という気持ちが強く、それは 1995 年 3 月に私が名大で文部省の科学研究費を頂戴して建築・都市環境に関する環太平洋シンポジウムを催したとき、これに並行して企画し京王ブ



ラザホテルにて開催した日中環境産業懇談会を強力に推進してくれ、中国の学・業界及び地方政府からの参加者を含め約 40 名、日本からは約 100 名が参加して活発な討論と産業交流が行われた。このときに彼の実行力を認識したのであった(この懇談会にメッセージを送ってくれたのが当時河南省の省長で現在は中央政治局常務委員を務めておられる李長春氏であったことは特筆できよう)。このたびの交流では李君のおかげで上海市政協(正式には「中国人民政治協商會議上海市委員会」の有力メンバーとの環境シンポジウムが実現した。

あの二人の女性、これも私の自慢の娘たちであるが、自ら会社を起こして日系のゼネコン・サブコン・設計事務所とも仕事のつながりの多い楊靖さん、世界一のっぽビルにならんとする上海森ビル(正式には上海環球金融中心、Shanghai World Financial Center)新築工事のオーナー側工事監理要員として勤



務中の李小平さんにも協力してもらえば、何れも日本語が達者、通訳として喜んで貢献して下さるだろうし、最新の高層ビルの林立する浦東地区のみでなく、旧上海市街の新旧入り混じった風情ある環境も味わって貰えるだろうと、時田常務と相談しつつ旅程を組み上げたのであった。お二人とも快諾してくれたのであるが、残念ながら楊靖さんが直前になってインフルエンザに罹って動けなくなり、通訳と案内の役は二人の李さんと団員の何原さんとが立派に務めてくださった。

市政協の二人の女性

政協での座談会とそれに次ぐ公式会見の場は普通の視察団では滅多に体験できない貴重な場であったろう。李克欣君との事前の手配が十分に行われたので、まるっきり政府機関でも民間団体でもない、李君に言わせれば言わば上海市の参議院だという政治協商会議のお集まりくださったメンバーは我々を歓待し、お互いにしあった挨拶とプレゼン、そして歓迎の昼食は圧巻であったと言っても言い過ぎではないと思う。この中で時に目立ったお二人の魅力的な女性がいらっしゃった。座談会の司会進行役を務めてくださった周劍萍上海市政協人資環建委主任と、公式の会見と昼食のホストを務めてくださった謝麗娟上海市政協副主席である。謝副主席は以前上海市の副市長のお一人で在られたとのこと。分刻みのスケジュールの中、朝の交通渋滞と政協の

守衛さんのミスから隣の建物に案内されたりしたために会議場への到着がぎりぎりになってしまい、発表の準備に手間取っている間、周主任は静かにこやかに私たちの到着と準備を待ってくれ、開会のご挨拶も当日のプログラムの日中両国にとっての重要性を、特に中国の環境・エネルギー課題の解決のための絶好のチャンスであると素直にお話をされた、良く考え込まれたご挨拶であった。これに対して筆者は用意したパワーポイント利用した主題解説を兼ねた挨拶をさせて頂いた。



謝副主席は、午前中の欠席を詫びた後、この技術交流会が上海市の建築省エネ事業に非常に有益であり、両方の専門家・政府官員・エネルギー管理会社・研究所の人々が互いに考えを述べ合うことによって上海市の建築省工事業の推進に役を立つと思うと述べ、今後の活発な技術交流を望まれた。筆者はあの形式、即ちテレビでお馴染みの、小卓を挟んで主役が互いに横向きに座り、隣の相手とともに陪席の方たちに語り聞かせる形の公式会見は幾度か経験はあるが何れも大学の学長や学部長級の人との会談だったので、久しぶりに、しかも空間の大きさも陪席者の数も比較にならないスケールであったので多少面食らったものの、筆者と中国とのつながり、今回の訪問団の意義と期待について述べて、あらかじめ時田さんに諮って用意しておいた赤富士の額をお土産として送り、また筆者の著書(ビル・建築設備の省エネルギー)を、役立てて



くださることを願って贈呈した。

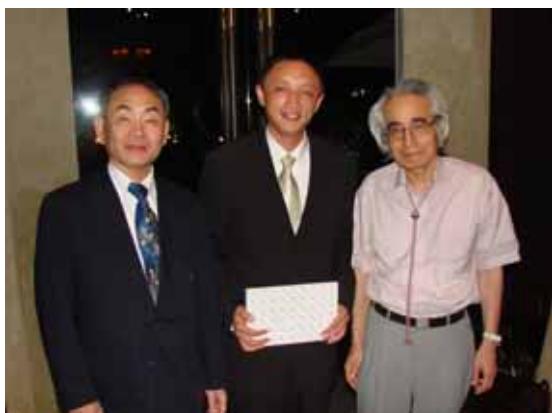
さて、このあとの昼食会のメインテーブルでこのご両者と隣り合っての懇談の中で、お二人は元お医者さんであること、謝さんが要職について衛生関係の仕事の責任に就かれたときに周さんを引っ張ってこられたこと、その後周さんはずっと(注:継続してかどうかは不明)謝さんの下で仕事をしてきたこと、医者の職業が行政上の役割を果たすのに有益であったこと、謝さんは共産党員ではないこと、それでいて副市長の要職に着かれるのは奇異に感じられるが、もちろんその能力を買われてであったことのほかに、共産党独裁ではないことの象徴であったと思われること、などの話題があった。

いずれにしてもお二人の堂々とした、しかも細やかな気遣いを要所に示しつつも、てきぱきと間髪を入れない会話の進め方に魅せられた次第であった。間髪を入れずという点においては、これらの歓談、会談の間中、通訳の役を立派に務めてくださった我が方の通訳陣である李小平さんと何原さん、会食ではこれに李君と鄭君も加わって立派に仕事をして下さったことも協調しておきたい。ここに書留めて改めて感謝の意を表したい。

同濟大学

同濟大学は 1907 年にドイツ資本で創立、1927 年に国立大学に登録、工科大学から総合大学へと発展、1952 年の大学改革により土木・建築の重点大学に変身、その後ドイツとの国交回復によって 1978 年より再び総合大学へと展開してきた、とデータにある。このたびは上海中心街の外れに在る同濟大学に比較的近いホテルに宿泊したにも拘らず、また準備時点で時田さんの強い希望が有ったにも拘らず、同濟大学訪問ができなかっことは申し訳なく思っている。それに代わって街の中心部に近い留学生会館で、同濟大学の范先生系列の方々に来ていただいてシンポジウムを

行った。筆者の知る同濟大学はもう 20 年以上前のことでのことで、そのときはちょうど二世代前の陸今鐘先生などの長老教授陣が退かれる直前であり、范先生は機械工学科暖通教研室の副教授として空気清浄の研究に携わっておられた。当時の記録(空気調和・衛生工学 1984.5)によれば大学での座談会に同濟大学の先生方を中心に 28 名が参加されたとあるから、環境・衛生・ガス等の教員人を加えたとしてもかなりの数になる。しかし筆者は范先生の人脈しか存じていない。李克欣、李小平両氏は范先生の教え子であり、その他少なからぬ学生が日本の幾つかの大学に留学された。留学生博物館でのシンポジウムにて発表された龍維定教授、華東設計院の葉大法総工程師も然り。ただし日本と同じように中国の大学も激動時代にあり、龍教授の勤務先は新たにできた郊外の分校になったと聞いた。なお、葉氏は筆者の著書(ビル・建築設備の省エネルギー、省エネルギーセンター)中国語版の翻訳者の一人であり、同氏を含む華東設計院のグループが著した「高層公共建築空調設計実録、中国建築工業出版社、1997」は浦東地区高層ビル街発展の前半の事情を知るデータ集となっているので紹介しておく。



今回のセミナーで同濟側のホストとなられた吳越教授は城市発展研究センターの主任教授で、ハーバード大学より帰国された方で都市計画の担当でいらっしゃる。帰国後、上海

万博の基本計画の諮問委員会のメンバーとして各種の意見を述べられたとのこと、しかし現状進行しつつある会場経過には都市環境の面からご不満のようであった。李克欣君との接点について聞き損ねたけれども、今回のホストになられたことは呉氏の見識と興味の該博さの存する所であろう、晚餐会で隣り合った席上での会話から汲み取られた。機械系が中心の中国の空気調和の分野の方々と都市計画系との協働は上海の都市環境に良き未来を予想させるものである。なお、昨年度の尾島先生の調査団が懇談会を持たれた建築都市計画学院とは別の組織のようである。

空気調和に関する最近の同済大学の研究事情については清華大学ほどには聞こえてこないので正直なところ筆者はよく理解して居らず正しい情報として伝えることはできない。しかし 25 年前でさえ前述の陣容があったのであるから現在は相当の陣容であるはずである。中でも制冷学会関係では上海地区でリーダーシップを取っており、龍維定教授は国際会議にてしばしば論文発表されている。また 2004 年の空気調和・衛生工学会大会講演会(中部大学)において、前記の葉大法氏とともに国際セッションにおいて発表された張旭教授は、西安から赴任された方で暖通空調(空気調和・換気設備)の主力教授であるとの噂である。また、矢張り范先生の弟子で東大大学院博士課程終了の譚洪衛教授も日本語に堪能で、日本の空調関係企業とも多くの協力関係を結んでいる。

同済大学がホスト役になっている国際会議に ACHRB(高層建築の空調システム)があり、筆者も基調講演を始め幾度か出席してきたが、この第一回か第 2 回目かに香港と上海の 2 箇所で(直列風に)開催された同名の国際会議があった。その時は香港が主導権を持っていたがそれを上海同済が引き継いだものと思われる、歴史のある会議である(この情報が正確か否か、引継ぎの細かい事情は筆者は存じてい

ない。また同香港会議には日本からは、娘を同行した筆者のほか、畏友牧英二、石福昭両氏、同じ会社に居た岡達雄君らも一緒に参加されていた)。そうだとすれば今回北京で開催された。ISHVAC2007 が清華大学がホストの国際会議として 1991 年に第一回がキックオフしたものであるから、ACHRB のほうが先輩格ということになる。

BS 07

Building Simulation は IBPSA (International Building Performance Simulation Association、国際建築性能シミュレーション協会)という団体が主催している伝統ある国際会議である。記憶のある方も居られようが、1970 年代に、NBS(現在の NIST)に居られた故楠田玉巳博士によって提唱され、東京でも開催されたことのある「建築環境工学におけるコンピューター利用に関する国際会議」というのがあって(東京でも開催された)、その延長上にあるのがこの IBPSA である。それが世界各地で開催されるのは次のような地域展開策があるからである。



IBPSA は 1987 年に初めて組織された非利益団体であり、協会の主目的は、新築・既設建物のエネルギー性能や環境性能をよくするために、建物性能シミュレーションの実施を促進し進展させることにある。IBPSA は、幅広い成果やサービスを産みだし、建設産業に関わ

りコンピューターを基盤にしたツールで適切な成果をもたらすことを目指す人々にそれを伝え利用できるようにして、使命を果たそうとしている。そのため IBPSA は戦略計画として、組織活動を含む次の 9 点を掲げている。

- 1) 機械・建築界という専門組織との協力
- 2) 現在の最先端技術を含む開発成果を定期的に照会し保存してゆくために国際学会を継続的に開く。
- 3) 建築シミュレーションの技術が、その時点での技術の方向性に影響を与える。
- 4) 高度教育機関や継続的な専門家養成における建築シミュレーション教育を主導する。
- 5) 性能評価のための標準手法の設定や標準支援データを供給する。
- 6) 実務家への IBPSA の成果やサービスを拡大するための会員勧誘活動。
- 7) 建築ライフサイクルの全ての段階で、コンピューターを基礎とする全分野における性能評価の教育に関する技術を提供する。
- 9) 前記した活動の地域展開。

筆者が 1997 年に、プラハに行きたいばかりに氷蓄熱のシミュレーションによる故障検知診断の論文を提出して出席したとき、吉田治典先生(京大)と宇田川光弘先生(工学院大)もご一緒であった。ちょうどその頃の IBPSA の会長が 2 代に亘って名古屋大学の客員教授としてお招きしていた(Prof. Sowell と Prof. Degelman)因縁によって 99 年の BS を日本で開催することを約束し、吉田先生にお願いして京都に開催地を決めたのである。この分野で京都が会議開催地として俄かに有名になったのは、この事実がきっかけであったことは間違いない、もちろんその間の 97 年 12 月に地球温暖化防止京都会議(UNFCCC COP3)があって京都の名前が俄かにそれまで以上に世界中の人々の口の端に上るようになったことも大きいに關係はある。京都会議では論文 Abstract 受付数は 286 で、発表論文数は招待講演(楠田博士)を含めて 183 編、ソフトウェア

デモが 11 編、会議参加者は 324 名であった。これに対する今回の清華大学で開催された北京会議の規模については、あの担当者の報告によって比較してみていただきたい。

ISHVAC 07

この会議で故デンマーク工科大学の故ファンガー教授、清華大学の超教授と共に、筆者が ISHVAC の功績者として議長である江教授より表彰されるという栄誉を賜ったことの経緯について紹介させていただきたいと思う。



ISHVAC は 1991 年に清華大学環境研究室の超教授が議長となって始めて開催され、以後 4 年ごとに開催されてきた。この会議での基調講演に 91 年より 2003 年まで連続して故ファンガー教授と超教授、そして筆者と今一人別の方(最初の頃はフィンランドの Seppanen 氏)が基調講演を行った。Fanger 教授が惜しくも米国の地で病のために命を落とされてついに講演不能となったことや、超教授も定年退官され、筆者もこの数年の間に日本の若手研究者や有力な団体の方々に今後の交流のバトンタッチができる体制を築く機会を得たこと、そして清華大学も文字通り若手の実力者

である江・朱両教授にバトンタッチされることになったことなどから、今年はぐっと若返って江教授と日本の伊香賀教授にもうお一方が、基調講演をされることとなった。

さて、91年の会議と16年後の今年の会議を比較すると文字通り天と地の差があることに愕然とする。91年、95年、99年くらいまでは国際会議と言い条、真にいい加減なもので特にポスターセッションの管理は論文をコピーして張り付けたり、出席者がぜんぜん居なくてキャンセルになるセッションがあるなど、もちろん一方では臨機応変にプログラムを組みかえる器用さもあって感心?するところも有った。研究内容ははじめの2回くらいはまともな英語が聞けるのは海外からの中国籍の研究者の帰国発表が殆ど(それは素晴らしい流暢な英語である)で、清華大学の学生にしても、ましてやその他中国各地の大学からの発表者の英語は、こちらが優越感を持たせてもらえるほどのものであった。しかし内容に関しては2回目ぐらいからは清華大学の発表は質が上がり始め、2003年に新築なった清華同方ビルで開催されたときはまったく一人前になっていたし、清華大学以外からの発表も質が高く、あれあれといううちに英語のレベルも中国側のほうが上になってしまった。そして今年の会議はBS07に連続して同じ場所で行われたのであったが、確かにネーティブの英語とはかなり違うけれども、筆者レベルの日本人の英語よりはかなりましな発表が各部屋から聞こえてくる。研究内容ももうどこに出しても恥ずかしくないものが多くなった。

ということも一つの原因、清華大学の努力が漸く実って中国の大学の研究水準も向上したと判断したことが主たる原因、そして影の原因はもういい加減ほかで頑張って頂戴よ、ということであろう、ISHVACは清華大学を離れて同じ名前のまま、全国各地の大学で持ち回りの会議とすることに定まった。なお、1999

年の会議は実は清華大学を離れて深圳で開催された経験がある。多分そのときに一度このような持ち回り方針を決めかけたけれども、未だ機熟さとの結論を出して今日まで延期したのではなかろうか。

今回の会議で筆者は空調システムというセッションの司会を頼まれ、いつものことなのであまり気にもせず準備もせずに場に臨んだのであるが、実はフォーラムセッションであったことが分り、しかも直前のフォーラムセッションに出席してみると、司会の LBNL の Have 教授がしっかりとプレゼンをし、その途中で江教授との間で激しい議論が行われるなど、これはやばい、と思ったのもとき既に遅く、副司会の魏(Wei)さんがちゃんと準備してくれているという朱さんの言葉を信じてセッションを何とかやり過ごした次第。



ところがその次の日に江先生が司会する地域冷暖房のフォーラムセッションがあり、一昨年の視察団のメンバー有志との間に行つた地域冷暖房議論、さらに昨年名古屋で行った名古屋での日中シンポジウムにおける同じような議論に続いてぜひここでも討論したいからどうか、日本から出席して欲しいと頼まれ、さあ弱った!最終日の人質は司会を頼まれた市川さんだけだったはず、ほかは観光の予定となっていた!当日の朝まで悩んだが、結局江先生の司会振りへの興味もあり、時田さんの、観光スケジュール変更しても何人かで他方

が良いだろう、との励まし?によって結局このセッションの出席は日本人が圧倒し、討論や意見交換も十分に行われて非常に良かったと思う。清華大学での最後のISHVACの最後のセッションとしては、ずっと携わってきた筆者としても、引率してきたグループの誠意を見てもらえる結果となったことも大変嬉しく、参加各位に感謝すると共に、今後さらに清華大学との友好関係、研究の競い合いも続くであろうと胸をなでおろした次第であった。

終わりに

筆者の悪い癖でついついこれ見よがしに過去の体験を物語ってしまうのですが、今の姿だけでなく来し方に思いを馳せて行く末を見据えることが大事と思う余りのことですのご容赦ください。今回の視察団の一部の方は一昨年度の北京・西安視察にも参加されていますが、そうでない方はぜひ一昨年度の報告書をお読みいただけすると、今回のと合わせて北京・上海・西安を中心とする、中国の近代空調技術の発展の大要は把握していただけると思います。研究と人材育成との視点から大きな役割を背負っておりながら私の解説から脱落しているのはハルピン系列と湖南大学系列です。前者は昨年度尾島調査団の訪問地、吉林と瀋陽の建築工程学院の暖通系に繋がっている。後者は1980年代の私費留学生として日本各地の大学に来られた方が多く、朱先生や李克欣君、鄭明傑君らと同じく文革受難世代の方たちである。さらに幅を広げれば南京、重慶等がありますが、大学の統廃合で私が訪問交流してきた時代と若干名称と括りが異なっています(例えば瀋陽建築工程学院は2004年に瀋陽建築大学に、同じく西安冶金建築学院は1994年に西安建築科技大学に)ので、余り細部に言及すると現状と食い違うのでここではこの程度紹介するに留めます。

終わりに、今回の視察での団員諸兄の真摯な行動と国際会議の抄訳を含めた報告書分担

作業を完遂してくださったことに敬意と謝意を表し、なかんずくコーディネーターとして団内の友好的雰囲気の醸成と安全な行程管理に努力してくださいました、公共建築協会常務理事の時田繁殿に心からの感謝の意を表する次第です。

謝々!!再見!!

